

2012年7月30日

スポーツ復興支援活動レポート

被災地における高校硬式野球部員の冬季トレーニング指導およびボランティア活動補助

金沢星稜大学 島田一志

1. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトの趣旨は以下の通りであった。

- ① 岩手県釜石市の高等学校硬式野球部を対象に、現状のインフラでも実施可能な冬季トレーニングについて講習を行う。イベントとして講習を行うのではなく、現地高校生が現実的に継続できるトレーニングに関する情報を提供する。
- ② 茨城県の高校野球部員が被災地（岩手県大槌町および岩手県釜石市）で活動するために、集団行動および危機回避などについて事前の教育を行う。また現地で安全に活動を行うためのサポートを実施する。

2. 活動主体および組織

本プロジェクトは、島田一志（金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科准教授）が代表者を務め、茨城県立日立第一高等学校硬式野球部（以下、日立一高野球部）とともに活動を行った。本プロジェクトに参加したメンバーは以下の通りである。

- 1) 宮本匠（筑波大学大学院修士課程人間総合科学研究科野球方法論研究室）
- 2) 中山顕（茨城県立日立第一高等学校教諭）他、同校教員 2名
- 3) 茨城県立日立第一高等学校硬式野球部員 18名
- 4) 金沢星稜大学人間科学部スポーツ科学科在籍の学生 2名

3. 活動内容

3.1 事前講習：2012年2月22日（水）

本活動では、高校生を引率したうえでの活動であったために、絶対に事故を回避するための細心の注意が求められた。また、冬季であるために気象条件も厳しいコンディションとなることが予想され、万が一に災害が発生した場合を含めた上での対応を講じる必要があった。

このことを踏まえ、活動に向かう前の2012年2月22日（水）に、日立一高において本活動に参加する野球部員に対して島田および中山の両名が事前指導を行った。事前指導においては、災害地に近い場所（岩手県盛岡市）の出身である島田、災害地に所在する高校に多くの知己が勤務している中山が現地の状況を説明したうえで、ボランティア活動を行うための心構えなどについて講義を行った。

さらに、余震等のリスクを考慮し、万が一に備えての迅速な行動を可能にするための集団行動訓練を行った。

具体的な内容は以下の通りである。

- 1) バディシステムの採用

参加するメンバー全員の安全を確認しやすくするために、バディシステムを採用した。バディの組み合わせは日立一野球部の監督が決定し、活動中はこれを固定した。また、3 バディで1 班を較正し、活動中の各班について日立一野球部の教員が1 名ずつ必ず付帯することとした。

2) 集団行動の練習

筆者（島田）は、金沢星稜大学において1 年次生の必修科目であるスポーツ総合演習を担当している。この科目は、スポーツ学科に入学する1 年生に対し、長距離の集団歩行およびドラゴンボートの漕艇など学外での活動を通して安全且つ効率的な集団行動を指導するものである。本活動においては同科目のカリキュラムを利用し、地形に応じた集合や迅速な点呼の方法を事前に学習した。図1は、現地での活動における点呼および移動の様子を示したものである。



図1 (左)大槌町内における活動終了後のバディシステムによる点呼。
(右)釜石市内での活動中、整列を保持しての移動。

3.2 大槌町および釜石市におけるボランティア活動：2012年2月24日（金）～2月26日（日）

本プロジェクトの日程は以下の通りであった。

2月24日（金）夜に日立市を出発して車中泊

2月25日（土）大槌町におけるボランティア活動

2月26日（日）午前中、釜石市でボランティア活動および釜石市における冬季トレーニング指導。昼過ぎに釜石を出発、夜に日立し到着。

① 大槌町におけるボランティア活動

大槌町ボランティアセンターの指示により、10：00より仮設住宅の高齢者への弁当の配布および通学路の除雪を行った。昼食をはさんだ後、午後も通学路の除雪を行った。ボランティア活動終了後、岩手県立大槌高校硬式野球部を訪問し、交流を行った。同校硬式野球部監督の話を伺った後、日立一高からの義捐金を渡した。



図2 (左上)仮設住宅の高齢者へのお弁当の配布。(右上)大槌町内の通学路の除雪。(左下)大槌高校硬式野球部の選手と。

② 釜石市におけるボランティア活動

当初、岩手県立釜石高等学校、岩手県立釜石商工高等学校および日立一野球部が合同でトレーニング講習会を行う予定であったが、諸般の事情により予定を変更し、日立一野球部は釜石市立鶉住居小学校の引越しを手伝うボランティア活動を行った(図3)。



図3 鶉住居小学校の移設。

③ 被災地の高校野球部へのトレーニング指導

岩手県立釜石高等学校および岩手県立釜石商工高等学校の硬式野球部員を対象に、現状のインフラで継続して行うことが可能な冬季トレーニングについて指導を行った(図4)。トレーニングには、現地の状態を考慮して長縄跳び、ハードル、ティッシュペーパーなど、いずれも通常の高等学校に普遍的に存在するもの、あるいはきわめて安価な器具を用いた。



図4 トレーニング講習の様子.

4. まとめ

本プロジェクトを立案するにあたり、筆者らは「本プロジェクトの参加メンバーはいずれも一介の教員、学生および生徒にすぎず、いわゆる“被災地の市民を力づける”ような力は持ち合わせていない」という自己認識を共有した。その上で、1) イベント的な活動を行うのではなく現地の高校野球部員が継続可能なトレーニングを提案する、2) 被災地の市民の生活向上にわずかながらも一助となりうる活動を行う、という2点を柱として具体的内容を考案した。

本プロジェクトの一連の活動において、日立一高と釜石高校の野球部の指導者間で次年度以降に改めて練習試合を行うことなどが概ねではあるものの合意された。また、トレーニング講習会には釜石市内だけではなく沿岸地区の他校からも指導者が参加した。このように、“大学と高校”ではなく、体育・スポーツ活動の活発化のために（地域の異なる）高校間の交流を促進することも、大学体育の関係者が行うことのできる貢献といえるであろう。

また、本活動は高校生を引率したうえでの活動が含まれていた。活動を振り返って、大学における演習科目（スポーツ総合演習）のコンテンツを利用することは、活動中の生徒に対する指示の伝達、あるいは点呼による迅速な安全の確認など、集団の安全管理という観点からきわめて有益であったと感じる。これらの一連の活動は、被災地においてスポーツそのものを行うものではない。しかしながら、コンテンツが大学における体育・スポーツの関連カリキュラムから派生したものであること、また中学および高校における集団行動に関する活動は保健体育の授業において生徒に指導されるものであることを考えると、ボランティア活動の重要性が認識されつつある現在、これを安全かつ効率的に遂行するための知見の提供および活動のコーディネートは、大学体育が行い得る社会への有益な貢献であるといえよう。



図5 (左) 鶯住居小学校の移設後、釜石市内にて。(右) トレーニング講習に参加した釜石高校および釜石商工高校の選手。